

楽亭西馬作『岸柳四魔談』と馬琴草双紙

三 宅 宏 幸

一、楽亭西馬と『岸柳四魔談』について

岩本活東子著『戯作者小伝』（安政三年「一八五六」成「夷福亭宮守」に^①、「夷福山人」と号し、又福亭禄馬と号す、今楽亭西馬と改む、西宮新六といへる本材木町一丁目の絵双紙問屋也、文政十二年の火災にかゝりて家衰へて、後水谷町に移住し、家主となりて久兵衛と改名す、傍備書をなし、又戯作をなす」とあるように、楽亭西馬（一七九九—一八五八）は江戸本材木町で絵双紙問屋を営み、文政十二年（一八二九）の火災で本屋業を廃してからは備書と戯作を業とした。式亭三馬の門人でもあり、三馬の遺稿を出版した人物としても知られる。^②

西馬が手がけた作品に『岸柳四魔談』という未完の長編合巻がある。本作については従来あまり論じられたことはないが、本稿

では『四魔談』（以下『四魔談』と略称）が種本とした典拠について指摘し、西馬作末期合巻の一面を明らかにする。

まず『四魔談』の概要を紹介する。^③ 楽亭西馬作・歌川国輝画の合巻、全四編。初編は嘉永三年（一八五〇）、二編同四年、三編同五年、四編同八（安政元）年刊。板元は江戸・山口屋藤兵衛、角書に「巖窟蓄玄皆本武者志」とある。四編巻末に「これこの二人の武士は何者ぞ、そは五編のはじめにいづるを見て知り給ふべし」と記すが、五編については未見。以下に梗概を示す。

——皆本武者志は老仙から巻物を授かり武者修行に出発、旅の途中の船で大鱈を退治し、芸者を巡る諍いから花木淀九郎を救い、門人とする。赤松満祐の落胤蓄玄は邪法を習得。近江の佐崎判官の正妻磐井前、悪臣牛窪典膳は庶流佐崎刑部の子鷲丸を養子にと企むが、側女の沖見が懷妊。典膳と蓄玄は沖見の流産を画策。武者志は梅畑

香之進かうのしんから怪異の解決を依頼され、大略を退治する。沖見は密通を偽装され、宿下がりする（以上初編）。飛驒の豚栗比止市の娘女蘿むすむすと通じた虚無僧の美少年は実は猿であり、依頼された武者志が退治するが女蘿が子（後の夜猿丸やえんまる）を産む。下総の里見右衛門督さとみみえもんのかみは老翁から息子総若丸そうわが丸の苦難や、娘音姫ねねひめの婿が木樵の桂太郎であると占われ、桂太郎を殺そうとするが、家臣の阿比古図書あひこずしょが逃がす。伊豆の三浦前司みづぜんしは右衛門督殺害と音姫略奪を計画、夜猿丸が助力する。一方、伊予の佐崎刑部に仕える蕾玄わづらぎ（蕾作）は、大房英蔵おほふさえいざうや古池藻三郎ふるいけもさぶらうと親しくなる（以上二編）。三人は仲違いから英蔵が藻三郎を、蕾玄が英蔵を殺害する。英蔵の弟英之助えいのすけと藻三郎の妹浮草うきくさが仇討ちの旅に出る。沖見は賢千代の産後に死去（以上三編）。京に向かう判官一行を典膳らが闇討ちする。判官が埋葬された寺の住持は夢で判官に遺言書を託され、それを香之進に届ける。香之進らは典膳の悪行を糺し、典膳は自殺。蕾玄は仏参帰りの香之進を殺害する。蕾玄は二人の男に取り囲まれたものの逃亡（以上四編）。

『四魔談』は「巖窟蕾玄皆本武者志」の角書を持つが、題が類似する作に式亭三馬作『岸柳島物語』がある。山崎麓編纂『改訂日本小説書目年表』文政五年の項に、^④

「宮本武者／巖窟雷玄」岸柳島物語 六 式亭三馬 歌川国貞とあり、角書も外題も近似している。ただし『岸柳島物語』は、国

文学研究資料館「国書データベース」でも「日本小説年表による」とのみ記され、所在不明のため内容が確認できない。だが本作の巻数が六巻だとすれば、合巻は一巻につき五丁、六巻で全三〇丁と想定できる。^⑤ 対する『四魔談』は初編から四編それぞれが二〇丁ずつで、総計全八〇丁、三馬作『岸柳島物語』よりも五〇丁多い。したがって、『四魔談』が『岸柳島物語』に基づくとしても、内容は西馬によって増補されたと推測できる。^⑥

二、『四魔談』と宮本武蔵物

『四魔談』初編序に次の記述がある。

早陽后卯詣さうしんごのうまぎより、臥龍梅の園を巡りて、帰路兩國橋上をわたるに、前後に富筑二山の風色を眺め、賑へる街を賤許せんぎょに戻りて机上に向ひ、扱一日の遊観を考るに、是皆釋史の稿と成りぬ。先臥龍先生を思ひ出で、鬼一法眼を巻首とし、講釈場の二刀伝、又武者修行の筋をまく、席浄瑠璃の島物しまもの語りがたりに蕾玄の名を変仮つ。

序によると、「臥龍梅」を見たことで「臥龍先生」（諸葛亮、字は孔明）を想起し、「鬼一法眼」を発端に用いるとする。おそらく、軍師という立場の孔明から義経に兵法書「虎の巻」を受けた鬼一法眼へと連想が働いたと思われる。また、「富士筑波の「二山」から

「二刀伝」（宮本武蔵物）を連想したのか、武蔵の武者修行の構想を借りることになったことや、人形浄瑠璃『島物語（姫小松子日の遊）』に登場する「来限」から「蓄玄」の名を借りたことを記す。

なお「島物語」の書名からは、平賀梅雪作・速水春暎齋画『絵本二島英勇記』（享和三年「一八〇三」序刊）という宮本武蔵物読本も連想できる。序に書かれた内容が事実とは限らないが、「二刀伝」などの宮本武蔵物に「武者修行」の影響を受けた可能性は高い。

実際『四魔談』では、山で武五郎が剣術の練習をしていたところを異人に誘われ、修行することになる。そして上達した武五郎に対して異人は、

「さて御身武術の稽古、日ごと試みるに、この節は大方上達せり。よつて我、伝授の奥義を伝ふべし」とて、一巻を取り出し、武五郎に与へ、「御身世に出でなば抱へんといふ者あるとも、未だその身をおさむる時にあらず。四十を超しなば良き主を選びしむべし。それまでは主取りよろしからず。なを影身に添ひて武運を守るべし」

と述べて、一巻の奥義を渡し、四十歳まで仕官しないよう戒める。武五郎は皆本武者志正好と名を改め、武者修行に立出する。

幕末期に「武者修行」が流行したと思われ、宮本武蔵物が数点出版されている。梅亭金鷲作『宮本無三四二刀伝』（嘉永六年刊）、槐

亭賀全作『宮本無三四武勇伝』（文久元年「一八六一」刊）、岳亭定岡作『宮本無三四実伝記』（慶応二年「一八六六」序）などであるが（『絵本二島英勇記』が出版されて以降、刊行物では「無三四」と表記される）、この時期に宮本武蔵物が受け入れられたと見える。なお西馬自身も、『四魔談』の後に宮本武蔵物の『名響武術管』（安政五年刊）を著している。

さらに、『四魔談』四編序に、
講談の二刀伝、俳優の鍋蓋に、自在の釜の湯気激りて四方に鳴響き、

とあるのも注目される。「俳優の鍋蓋」とは『絵本二島英勇記』に描かれる二刀流の無三四が鍋蓋で対峙した笠原新三郎に敗れる趣向である。後に演劇化して人気を博し、明治にかけて無三四の二刀対笠原の鍋蓋という構図はよく描かれ、人口に膾炙した^⑦。加えて、武蔵もの実録・講談『英雄美談』に「文久二年戊三月求之」と記される諸本もあり、『四魔談』が刊行された幕末期に草双紙や実録・講談など様々なジャンルで宮本武蔵物が成立している。この時期に宮本武蔵物が流行していた証左となろう。

しかし、『四魔談』に宮本武蔵の名をもじった皆本武者志が武者修行するという共通点が見られる一方、具体的な筋や趣向などで宮本武蔵物との関連性は見られない。

三、馬琴黄表紙『武者修行木齋伝』の利用

『四魔談』の筋立ては、曲亭馬琴の黄表紙『武者修行木齋伝』に基づく。『四魔談』二編序に、

姫小松の島物語は平家女護島の類種にて、蝶花形の稚仕合は大夫の真鳥の場拔なり。各素ありて、是を稗史にいはゞ、八犬士の大既は水滸伝にして、浮世風呂の源湯は銭湯新話なり。其外譚談素話はいふに及はず。放下の奇業も種のなき品玉は遺はれず。此岸、柳四魔談も、寛政享和の黄表紙に猿の因縁因果経、夫に縁起かきの稿、木齋伝を武者志と替、……

と記され、種々の作品の種本に関する話の流れで、「木齋伝を武者志と替」たとある。この記述をうけてか、下中彌三郎編『大辞典』「岸柳四魔談」の項で、「宮本武蔵の伝を潤色して綴つたもの。木齋伝を取合はす」という指摘がある。しかし、挿絵を含めた両書の具体的な比較は行われたことがないようである。

『武者修行木齋伝』（以下『木齋伝』と略称）は馬琴作・歌川豊広画、文化三年（一八〇六）正月刊の黄表紙である。梗概を示す。

——美濃の木樵木蔵は天狗山伏の元で鍛錬した後、姪の梢を預けて武者修行に出る。木蔵は美濃で刃傷沙汰を取め、熊川かち兵衛を弟子にして道場を開き、木齋と名乗る。鎌倉管領山の内則房の姫

を怪異が襲うが、木齋が怪異の正体である狸を退治。山の内家の美少年梶原源次郎を養子とし、梢の婚約者とする。男色のかち兵衛が源次郎を口説くも断られ、望月荒右衛門と二人で源次郎を殺害。木齋は荒右衛門を成敗する。一方、かち兵衛は美少年で賊の頭領であるかね若に泥み、偶然木齋が泊まる宿に忍び込み、討ち取られる。

木齋が鎌倉に帰ると源次郎が帰宅、天狗に匿われていたと語る。源次郎と梢は夫婦となり、木齋は管領家に仕える。

梗概を見るだけでも、異人（天狗）の元で修行する点や武者修行に出る点、怪異を退治する点などの共通点が見出せる。一場面を例にあげると、『四魔談』で異人が武五郎に対し、

「汝に兵法の奥義を伝ふべし。さりながらこれより三年の間予に随ふて山中に住まいせよ。そのうちには武術の天下に続くものなきやう、とくと伝授すべし」

と話す台詞と、『木齋伝』における天狗山伏の台詞、

「我数年来人を試しみるに、その心の中を量り知らざることなし。然るに、汝が才知世の常にすぐれし故、我も量り知り難きことあり。汝もし青雲の志を遂げんと思はば、今より三年が間我に随ひて武芸を学ぶべし」

とで、三年の修行を求める点で一致する。武五郎と木蔵が剣術を学ぶ場面の挿絵の構図も共通していよう（巻末図1・2）。挿絵の共

通点は他にも見られる。紙幅の都合上、全てを取り上げることはできないが、船上から大鰐を退ける場面(図3・4)や夜な夜な女性を苦しめる怪異を倒す場面(図5・6)など、『木斎伝』の構図を変えながらも、種本の要素を残した挿絵が描かれている。

一方、『木斎伝』では天狗山伏に剣を学ぶが、『四魔談』では武五郎が授かった巻物を開くと、『武術の奥義委細に記しありて、末に吉岡鬼』法眼の末葉某と記したれば、さてはかの異人はその昔御曹司に六韜三略を巻を伝へし鬼一老翁の枝葉にて」と書かれてあるように、鬼一法眼ゆかりの人物に教わったと判明する。この天狗山伏から鬼一法眼の末葉と改める設定は、文耕堂・長谷川千四合作『鬼一法眼三略卷』(享保十六年「一七三二」九月竹本座初演)に取材している。本作の三段目に鬼一法眼が天狗の姿で牛若等の前に現れる場面がある。つまり、『木斎伝』の「天狗」山伏から「鬼一法眼三略卷」の鞍馬「天狗」を連想し、両書を綯い交ぜにして、天狗から鬼一法眼ゆかりの人物へと変更したと思われる。

以上のように、『四魔談』が『木斎伝』を利用していることは明らかである。登場人物も、武者志一木斎、異人―天狗、保市―梢、佐崎判官―山の内則房、沖見―山の内の姫、大貉―狸、が対応関係にあり、『四魔談』の種本として『木斎伝』が物語構想の機能を果たしている。

四、馬琴合巻『島村蟹湊仇撃』の利用

前章で『四魔談』発端が『木斎伝』に基づくことは確認できたが、読み進めていくと、猟師の娘が虚無僧の美少年(正体は猿)と通じて子を産むなど、『木斎伝』とは異なる様相が見られる。実はそれらの展開も馬琴の草双紙に由来する。

『島村蟹湊仇撃』(以下『湊仇撃』と略称)は馬琴作・歌川豊広画、文化四年刊の合巻である。梗概を記す。

——足利義政の御代、出雲を治める源高国は見通しの翁から、娘の音姫や息子の国若丸が艱難を受けると告げられる。阿波の狩人しぶがき佐次平の娘小枝は、美少年の虚無僧に化けた大猿と関係を持つ。猿と娘との間に生まれた子は魔術を得て摩斯陀丸と名乗り、山賊をしたがえて美女や財宝を奪うなど悪逆の限りを尽くす。再び高国の前に翁が現れ、音姫の婿が木樵の馬之介であると告げ、怒った高国は馬之介を殺そうとしたところを島村貴則が逃がす。阿波の三好長基は高国を追い落として権力を握ろうと画策、摩斯陀丸は三好に一味して高国を殺害、音姫を妖術で拐かす。高国の忠臣島村貴則は妻ふしまと共に主君の後を追って自害、貴則の魂は蟹に、ふしまの魂は魚へと変じる。音姫は囚われの身となっていたが、蟹が姫を縛る縄を切る。蟹は貴則とふしまの姿に変じると、摩斯陀丸の隙を

狙って姫を救出。姫は筏のように連なる蟹の大群によって尼崎の岩窟へ運ばれる。島村夫婦の霊魂は音姫の弟国若丸を助け、馬之介も助勢に加わって摩斯陀丸と長基を討伐する。

『四魔談』と『湊仇撃』の梗概を見比べると、娘が関係を持った虚無僧の美少年が実は猿である点、猿の子が悪役となる点、占いの老翁から姫君の婿が木樵であると告げられ、怒った領主が木樵を殺害しようとする点などの共通点が見られる。具体的な場面をあげると、虚無僧と女性が出会う場面において、『四魔談』は、

「……今日はからずも途中より持病さしおこり、さしこみ強く耐へがたければ、今までこの木の根に休らひしが、何卒哀れ湯を一つ無心致したし」と言ふにぞ、

と、虚無僧が旅の途中で持病から一杯の湯を所望する。一方の『湊仇撃』でも、

年の頃一七、八なる虚無僧、佐次平が門に立ち、「途中より殊の外腹痛みて耐へがたし、湯を一つたべ」と言ふに、

とあるように、旅中の腹痛によって一杯の湯を求めており、両書で一致する。登場人物も、比土市―佐次平、女蘿―小枝、右衛門督―高国、音姫、桂太郎―馬之介、阿比古図書―島村貴則と対応し、『四魔談』が『湊仇撃』を用いたことは間違いない。

物語の筋に加えて、挿絵に関しても共通点は多い。例えば、大猿

と女性との間に産まれた赤子が産婆を噛み殺す場面(図7・8)や、姫の婿が木樵と知った領主が木樵に弓を射かける場面(図9・10)など、その特徴が確認できる。他方、『四魔談』で変更されている構図もある。虚無僧の正体が大猿であることが判明し、猟師の比土市たちが銃で猿を退治する場面(図11・12)は、『湊仇撃』では構図全体を用いてその様子を描くが、『四魔談』では美少年(大猿)と女蘿が一夜を過ごす艶やかな様子の上部に、別場面として小さく配置する。人情本に見られるような艶情的な雰囲気のある『四魔談』の挿絵は、初期合巻の挿絵とは異なった様相を呈している。

また物語展開に関し、『四魔談』は一工夫を加えている。『湊仇撃』では、占いの翁が源高国に音姫と国若丸の艱難を告げる→話変わって小枝が猿との間に子を産む→再び高国の前に現れた翁が音姫の婿が木樵の馬之介であると告げる、という入り組んだ展開となっている。しかし『四魔談』では、占いの翁の登場を一度にまとめることで、筋の錯綜を解消している。

そして種本が判明することにより、『四魔談』の続編構想を推測することができる。『湊仇撃』では翁が占った際、

「姫君は一旦猿に見入れられて艱難し給ふことあり。しかれども忠臣守護するによつて身をも汚さず、後には栄へ給ふべし」と言ふ。又、国若丸を占ひて、「御幼年より武功あり。行く末

ますます繁昌し給ふべし。ただし、一旦は落ちぶれ給はんか」と申けり。

と述べるに留まるが、『四魔談』二編で翁は、

「御幼年より武功の兆しあれば、良き師範を求め、武術を鍛錬なし給へ。そは今諸国を武者修行をなす稀代の武士あり。やがてこの国へ巡り来たるべし。その時を待ち、これを招きて兵法熟練なし給へ。さあらばその末長久たるべし。一旦は共に落ち給ふとも、行く行く繁昌疑ひなし」とぞ申しける。

と、後に武者志が登場し、総若丸の師として活躍することを示唆している。前章で指摘した『木斎伝』を利用した武者修行の展開と綯い交ぜにして構想を立てていると考えられよう。

加えて、『四魔談』四編の口絵にも『湊仇撃』の構想が見出せる。図13は口絵で縦に描かれる夜猿丸が音姫を攫う場面と思われるが、『湊仇撃』の構図(図14)を拡大したものであろう。口絵においても種本に基づく統編の展開を予告しているのである。

五、馬琴黄表紙『敵討鼎壮夫』の利用

『四魔談』は馬琴作・北尾重政画、文化三年正月刊の黄表紙『敵討鼎壮夫』(以下『鼎壮夫』と略称)をも採り入れる。『鼎壮夫』の梗概は次の通り。¹²⁾

楽亭西馬作『岸柳四魔談』と馬琴草双紙

——応永年中の頃、伊勢の国北畠の家中に堀越(ほりこ)団作・望月七三郎・花沢伝之介の三勇士がいた。団作は武芸で二人より劣ることを悩み、祈願したところ夢で助力を得る。後に七三郎と口論することがあり、伝之介はこれを止める。三人はそれぞれ遺恨を持ち、七三郎は伝之介を討つも団作に討たれる。七三郎の弟三次郎と伝之介の妹みさごは、仇団作を尋ねて旅に出るが、旅中に三次郎は病に死す。残されたみさごは一人で旅を続け、宿願が叶って団作を討つ。

『四魔談』二編から三編にかけて描かれる雷作、大房英蔵、古池藻三郎の三人に関する物語が『鼎壮夫』に依拠する。例えば、『四魔談』の古寺に肝試しに行くことを提案する場面、

英蔵が言へるは、「当国大洲の在に一里の荒れ野あり。そこに古寺ありて妖怪出づる由、住居する法師らも退転せしとの噂、よつて今は空き寺と聞けり。かの寺へ行きて虚説かまた誠か試し見んはいかゞ」と戯れに言ひけるを、

が、『鼎壮夫』の次の場面、

望月七三郎がいふやう、「当国斉宮村より小畑へかゝる道に湯田野といふ一里の荒野あり。この野中なる古寺には近比化物いづるゆえ、法師達も退転して、今は無住の由聞けり。いざや今宵かしこへ行て試しみん」といへば、

に拠ることは、その語彙からも認められる。他にも、三人が集まる

家に英蔵（七三郎）の弟英之助（三次郎）が尋ね、藻三郎（伝之介）の妹浮草（みさこ）が応対する点、古寺で蓄作（団作）が本物の死体を用いて二人を驚かせる点（図15・16）、三人が殺し合い、追っ手が蓄作（団作）の家に踏み込む点、英之助（三次郎）と浮草（みさこ）が蓄作（団作）を探す旅に出る点（図17・18）など、『鼎壯夫』をほぼそのまま利用していると考えて良い。登場人物も、蓄作―団作、英蔵―七三郎、藻三郎―伝之介、英之助―三次郎、浮草―みさこ、と両書で対応する。

一方で、少々設定を変える箇所も見られる。『鼎壯夫』で、若き者共大勢集まり、石をもつて遊びあたるが、その中に二三貫目の大石あり。……団作、易き事なりとて足駄履きながら、かの石をずんと差し上げ、やがて肩にかき乗せて見返りもせず走り過ぐれば、みなく大に肝を潰し、

と団作の力自慢として描かれた大石担ぎが、『四魔談』では、武勇嗜みの程を尋ぬるに、蓄玄何がなと辺りを見回し、傍に立てし石の道標杭を引倒し、右の拳振り上げて半ばより一つに打ち折りければ、

と、蓄玄が典膳に大力を示す趣向となっている。挿絵の構図（図19・20）は共通していても、物語展開に沿うように種本から物語順序や設定を変更する一手間を加えていることがわかる。

六、まとめと今後の課題

以上、西馬作『四魔談』は世界を宮本武蔵物に借り、『木斎伝』や『湊仇撃』、『鼎壯夫』といった馬琴草双紙を詢い交ぜにして物語を描出している。

そしてこれら馬琴草双紙の利用が判明することで、『四魔談』続編の次のような構想が想定できよう。すなわち、武者志が武者修行を経て、近江の佐崎家や下総の里見家と関わりを持つこと（『木斎伝』『湊仇撃』）、蓄玄を探し求める英之助や浮草に艱難があり、英之助が落命すること（『鼎壯夫』）、武者志が蓄玄や夜猿丸を討ち滅ぼし（『鼎壯夫』『湊仇撃』）、仕官して大団円を迎えること（『木斎伝』）、などである。もちろん、種本を利用しつつも構想を変更することはあり得るわけだが、武者修行する武者志が武芸でもって人々を救い、四十を超えてから良き主君に仕えるという結末（『木斎伝』）は揺るがないと思われる。

さて、西馬が活躍した幕末期の合巻について、鈴木重三「合巻について」¹³は「衰退期（弘化元―慶応三）」ととらえ、

趣向は枯渇し、かつての読本の当り作を合巻に引き直す安易な抄録物が出現し、あるいは、先行作品の種々の趣向や素材を乱雑に取込んで、刺激的な妖奇の世界を設定し、量のみいたずら

に膨張した長編ものの流行するのが、この期の様相でした。

と指摘した。末期合巻が依拠した読本作品について整理した服部仁「読本鈔録合巻の実相(上)——読本『墨田川梅柳新書』変じて合巻『花蓑笠梅雅物語』となる——」¹⁴⁾によると、西馬も少なからず馬琴読本の「抄録」合巻を著している(約七作)。だが本稿で述べてきたように、西馬作合巻が利用する馬琴作品は文化初期の草双紙に及ぶ。

文化期の草双紙といえ、ただちに『著作堂雜記抄』に収録された「合巻作風心得之事」が想起される。文化五年に書肆蔦屋重三郎から馬琴に届いた合巻著述の際の心得であるが、「男女共兇悪の事」「怪異の事」「女并幼年者盜賊筋の事」などを描いた作品は出版できない旨が記される¹⁵⁾。このことはつまり、右にあげたような作風が文化初期に流行していたことを示すが、本稿で指摘した馬琴の草双紙にも、狸が化した大入道の怪異(『木齋伝』)や、産まれたばかりの赤子が産婆を殺害する描写(『湊仇撃』)、女性の死体を肝試しに用いる趣向(『鼎壯夫』)など、比較的残酷な場面が見られる。

それらの草双紙が利用されたということは、文化初期の草双紙の様相が時を経て幕末期に改めて受け入れられたと考えることもできよう。とすれば、末期合巻全体における文化初期作品の再利用について、事例を重ねて検証する必要がある¹⁷⁾。

ただし注意を要するのは、第一章で述べたように、『四魔談』が三馬作『岸柳島物語』に依拠して記された可能性も残る。その場合、三馬が馬琴草双紙を利用したこととなり、三馬と馬琴作品との関係にも波及しよう。『四魔談』の検証を行ったことで、西馬の著述方法、宮本武蔵物作品の享受・展開、馬琴草双紙の享受、末期合巻の流行についてなど、種々の課題が浮かび上がってくる。

注

- ① 『燕石十種』2(中央公論社、一九七九・七、五二頁)。
- ② 佐藤至子「末期の長編合巻」『江戸文学』35、二〇〇六・一一。
- ③ 初編から三編は同志社大学所蔵本(913.57/R16578.1-c)を底本とし、国立国会図書館所蔵本(207-1669)を対校本とした。四編は専修大学図書館所蔵本(000/Z00/M0998.7)に拠った。
- ④ 『改訂日本小説書目年表』(ゆまに書房、一九七七・一〇、四三三頁)。
- ⑤ 『岸柳島物語』と刊年の近い架蔵『継父之仇討』(文政四年刊)も前後編各三巻で全六巻、全三〇丁の装訂である。
- ⑥ 注②佐藤論考が取り上げた西馬作『雲龍九郎偷盜伝』増補版(安政三(文久元年刊)も、同書名の三馬遺稿(文政十・十二年刊)作品を増補したものである。増補版『雲龍九郎偷盜伝』三編序には、初版の板木が火災で失われて製本の流通が少ないため、増補版を出版する旨が記される。『四魔談』の序にはそのような記述は見られず、『四魔談』が初版『岸柳島物語』を増補したのか、あるいは西馬が一から著したのか、初版を確認しない限り厳密には不明である。
- ⑦ 三宅宏幸「Literary background of Musashi Tsukahara shiaino zu

(The battle between Musashi and Tsukahara), a nishiki produced by Tsukioka Yoshitoshi)] ([Relações entre a Peninsula Iberica e o Japão: do séc. XVI aos dias de hoje]) Hinnus' (二〇一九・一二) が、『絵本二島英勇記』の演劇化や浮世絵を通じて、二刀対鍋蓋の図像が人々に流布したことを指摘する。

⑧ 下中彌三郎編『大辞典』7 (平凡社、一九三五・一、四五〇頁)。

⑨ 清田啓子「翻刻 曲亭馬琴の黄表紙(十五・了)」『駒沢短期大学研究紀要』31、二〇〇三・三)を参照し、カギ括弧等を補った。

⑩ 本作は「島村蟹湊仇撃」や「島村蟹水門仇討」とも表記されるが、本稿では底本とした立命館アートルリサーチセンター所蔵本 (IrajBK03-0251) や国会図書館所蔵本 (209-4) に付される序題や外題の表記「島村蟹湊仇撃」を採用する。「島村蟹水門仇討」の表記は巻末の広告に看取でき⁹⁾。

⑪ 『湊仇撃』の梗概は佐藤至子『妖術使いの物語』(国書刊行会、二〇〇九・九、二四九〜二五〇頁)を参考にしつつ、行論上必要な部分を論者が加筆した。

⑫ 棚橋正博『黄表紙総覧』後篇(青裳堂書店、一九八九・一二)の梗概を元に、本稿の文体と合わせる処置を行った。「鼎丈夫」の本文は注⑨清田論考を参照し、カギ括弧等を補った。

⑬ 『改訂増補 絵本と浮世絵——江戸出版文化の考察——』(べりかん社、二〇一七・一〇、二六〜二七頁)。

⑭ 『読本研究』5上(一九九一・九)。

⑮ 注⑭表1を参照。表1の整理は、石田元季『草双紙のいろく』(南宋書院、一九二八・一一)、注⑬の初出時の鈴木論考、興津要『転換期の文学——江戸から明治へ——』(早稲田大学出版部、一九六〇・一二)、後藤丹治「解説」『椿説弓張月 上』(岩波書店、一九五八・八)、石川

了「初代笠亭仙果年譜稿」(『大妻女子大学文学部紀要』11・12・14・15・16、一九七九〜一九八四)の研究や、向井信夫氏の御教示を踏まえた旨が記される。

⑯ 『曲亭遺稿』(国書刊行会、一九二二)収録。佐藤悟「草双紙の挿絵——文化五年「合巻作風心得之事」の意味——」(『国文学』解釈と鑑賞)63—8、一九九八・八)は合巻作風についての通達によって合巻挿絵の「嗜虐性」が薄れ、その後は「演劇趣味」を發展させた草双紙が確立される史的展開を指摘する。

⑰ 野田寿雄「流行色の問題」(『近世文学の背景』塙書房、一九六四・一〇、二四五頁)が『岸柳四魔談』等の書名をあげ、この時期に「歴史物や英雄譚の多いことが注意される」と述べる。享和・文化初期の敵討物との関連は無視できないのではないか。

〔附記〕 本稿は同志社大学国文学会二〇二二—二三年度春季大会で口頭発表した内容に基づく。席上や発表後にご教示頂いた諸氏に、また資料の閲覧や掲載の許可を賜った諸機関に御礼申し上げます。

電子データのため不掲載

【3】『四魔談』初編（10ウ・11オ）

電子データのため不掲載

【1】『四魔談』初編（5ウ・6オ）

電子データのため不掲載

【4】『木斎伝』（4ウ・5オ）

電子データのため不掲載

【2】『木斎伝』（2ウ・3オ）

電子データのため不掲載

【7】『四魔談』二編（9ウ）

電子データのため不掲載

【5】『四魔談』初編（15ウ・16オ）

電子データのため不掲載

【8】『湊仇撃』前編（5ウ）

電子データのため不掲載

【6】『木斎伝』（9ウ・10オ）

電子データのため不掲載

【11】『四魔談』二編（7ウ・8オ）

電子データのため不掲載

【9】『四魔談』二編（12ウ・13オ）

電子データのため不掲載

【12】『湊仇撃』前編（4ウ・5オ）

電子データのため不掲載

【10】『湊仇撃』前編（7ウ・8オ）

電子データのため不掲載

【15】『四魔談』二編（19ウ・20オ）

電子データのため不掲載

【13】『四魔談』四編
（2ウ・3オ）

電子データのため不掲載

【16】『鼎壯夫』前編（6ウ・7オ）

電子データのため不掲載

【14】『湊仇撃』後編（2オ）

電子データのため不掲載

【19】『四魔談』二編（16ウ・17オ）

電子データのため不掲載

【20】『鼎壯夫』前編（8ウ・9オ）

電子データのため不掲載

【17】『四魔談』三編（15ウ・16オ）

電子データのため不掲載

【18】『鼎壯夫』後編（2ウ・3オ）

【図版出典】

『岸柳四魔談』初・二・三編は同志社大学所蔵本（913.57/R10578/1-3）、四編は専修大学図書館所蔵本（000/200/M0998.7）、『武者修行木齋伝』は国立国会図書館デジタルコレクション（208—378）、『島村蟹湊仇撃』は立命館大学アートリサーチセンター所蔵本（hayBK03—0251）、『敵討鼎壯夫』は国立国会図書館デジタルコレクション（208—440）に拠る。